

校長室だより～和光高校今昔 第12号 H26. 7. 25

埼玉県立和光高等学校 校長 村田 進

ハンド部の奇跡

43年間の学校の歴史で、唯一球技でインターハイに出場したのが女子ハンドボール部でした。言うまでもなく高校総体は全国の高校生にとって目標でありあこがれの舞台です。従って予選も厳しく県代表1校、つまり夏の大会優勝校のみが出場の資格を得るのです。昭和56年6月21日、仲尾利夫先生（後の和光高校第12代校長）率いる女子ハンド部が川口女子高を決定戦で破り、埼玉を制しその年のインターハイ出場を決めました。

この快挙は、創立10周年とも重なり他の運動部へ大いに刺激を与えました。何故ならばハンド部は仲尾先生が着任された遡ることわずか6年前に創部され、なおかつ経験者はほとんどいない素人軍団、前年の新人大会も直前の関東大会でもさしたる実績を残していませんでした（ベスト8）。ただし引退を掛けたこの大会にかける意気込みは素晴らしく、トーナメント戦を勝ち抜け、さらに4校の決勝リーグでも次から次へと強豪を倒しついに頂点にたどり着いたのでした。かつて全日本学生でGKとしてならした仲尾先生の指導が開花した瞬間でした。インターハイでも、1回戦・2回戦と勝ち上がり3回戦では名門小松市立女子と接戦を演じましたが惜しくも破れてしまいました。小松女子はそのまま対戦相手を圧倒し勝ち上がり優勝、和光ハンド部、負けてなお強しの印象を全国に植え付けました。

翌57年には、山本亮一を主将とする9期生男子が頑張りました。関東予選でベスト4となり満を持してインターハイ予選に臨みましたが惜しくもその望みはかなわず涙をのみました。しかし堂々の3位、川口工業や川口北・浦和西・浦和実など強豪ぞろいの埼玉県でのこの結果は十分に胸を張れる成績でした。

当時のことを山本さんは次のように語ってくれました。

「一学年上の女子が全国大会に行ったので、当然次は男子の番だと力が入っていました。実力的には差はないと思っていましたが、決勝リーグでは



「気負いがあったのだと今になって思います。同じ学年でチームを作ることができ、チームワークも最高だったので本当に残念でした。県代表の川口北高が全国準優勝したことが救いでしたがやはり悔しかったです。」

実業団で活躍する選手を育てたもののその後は、男女とも部員不足に悩み残念ながら衰退の一途。およそ30年後の現在では、ハンドボールコートはもう消えている。夏草が生い茂るその場所はまさに、兵どもの夢の跡となってしまった。

